

Title	ムガル皇帝アクバルとふたりのスールダース : 聖者伝文学の記述をとおして
Author(s)	長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 2018, 17, p. 43-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68346
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ムガル皇帝アクバルとふたりのスールダース
—聖者伝文学の記述をとおして—

長崎 広子

ふたりのスールダース

北インドのブラジ地方で16世紀に詩人スールダース (Sūrdās) は、クリシュナ神の賛歌をヒンディー語の方言であり文語でもあったブラジ・バーシャーで著し、ヒンディー文学史に金字塔を打ち立てた。この高名な詩人の詩は、後代の編者によって『スール・サーガル (スールの海)』 (*Sūr Sāgar*) という名の詩集に編纂されている。詩人については、バラモン出身であったが、盲目のために心無い仕打ちを受け、ヴィシュヌ派クリシュナ信仰の聖者ヴァッラバ (Vallabha, 1479-1531)¹に帰依する話が一般に流布している。その根拠となったのが、ヴァッラバ派の聖者伝『84人のヴィシュヌ派信徒列伝』 (*Caurāsī vaiṣṇavan kī vārtā*) に八詩仙のひとりとして記されていることである。そこには彼の生い立ち、ヴァッラバ師と出会い、神の遊戯を感得し、さまざまな奇跡をおこしたことが描かれている。これらの記述から、スールダースはヴァッラバ派の寺院で賛歌詠唱者として一生を終えたと考えられている。

なお、古ヒンディーの「聖者伝文学」は伝記の一種に位置づけられるが、事実であったかどうかを検証するのが困難な奇跡で華やかに飾られた、実のところは聖者礼賛文学である。だが、「聖者伝が著された時代に、ある宗派のなかで、聖者と崇められていた人物がいた」ことを知る数少ない貴重な情報源である点に疑いはない。ヴァッラバ派の聖者伝には、先述の『84人のヴィシュヌ派信徒列伝』以外に、『252人のヴィシュヌ派信徒列伝』 (*Do sau bāban vaiṣṇavan kī vārtā*) があり、前者が開祖ヴァッラバの弟子の列伝で、後者はヴァッラバの息子で後継者のヴィッタルナート (Viṭṭalnāth, 16 c.) の弟子の列伝である。なお、両列伝はヴァッラバやヴィッタルナートの時代よりも後代に編纂されたもので、ヴィッタルナートの息子ゴークルナート (Gokulnāth, 16-17c.) に

¹ 開祖ヴァッラバは、中世北インドのバクティ運動を代表する純粹不二一元論の哲学者。自身の宗派プシュティ・マールグを開き、ひたすら神を愛することで在家信者でも解脱できると説く。宗派は、ヴァッラバ・サンプラダーイまたはプシュティ・マールグともいう。ブラジ地方とヴァッラバ派の関係については、Entwistle (1987) に詳しい。

よる編纂とも、原文の途中に挿入されている注釈を著した弟子のハリラーイ (Harirāy) によるものとも諸説ある。

さて、ナーバーダース (Nābhādās) 作『バクト・マール』 (*Bhaktamāl*) は、古ヒンディーの聖者伝文学として広く知られ、先のヴァッラバ派の聖者伝とは系統を異にするものである。著者ナーバーダースはラーマ信仰のラーマーナンド派²に属していたようだが、彼の著した『バクト・マール』には、神話上の聖仙や聖者からはじまり『ラームチャリットマーナス』 (*Rāmcaritmānas*) を著したトゥルシーダース (Tulsīdās) やクリシュナ信仰の女流詩人ミーラー・バーイー (Mīrā Bāī) といったヒンディー詩人の偉業も 6 行詩で描かれている。トゥルシーダースやミーラー・バーイーはラーマーナンド派ではないが、当時すでに有名になっていた詩人であったため、この列伝に取り込まれたと推察される。著者のナーバーダースはトゥルシーダースと同時代の 16 世紀ごろの人物であるため、古ヒンディー詩人に関する彼の描写は、貴重な情報源として信頼されている。

そしてこの『バクト・マール』には、スールダースに関する 6 行詩もある。スールダースもトゥルシーダースとおよそ同時代の人物であった。すでに述べたとおりスールダースはヴァッラバ派の信徒であるが、トゥルシーダースやミーラー・バーイーのように他宗派の信徒であっても、当時著名になっていたことから、ナーバーダースが自身の聖者伝に加えたかと推察されそうだが、結論を先に述べると、ナーバーダースの記したスールダースは、ヴァッラバ派の八詩仙とは全くの別人である。つまり、「時代的にも同じ頃に同じ地域にスールダースという名のもうひとりの詩人がいた」とナーバーダースの聖者伝は記しているのだ。同名の人物が存在することはありえないことではないが、それにしても紛らわしい。しかも調べをすすめるうちに、スールダースと名の付

² 開祖ラーマーナンド (Rāmānand, 14-15 c.) が、ラーマ神と神妃シーターへの信愛を説く。ラーマーナンド派 (ラーマーナンディーともいう) は、正統派のシュリーヴァイシュナヴァ派の系統であるが、低カーストや異教徒の信者に幅広く門戸を開き、一説には詩人カビールも信者であったという。

く人物は他にも複数いたらしいことが分かった³。それらの中で、盲目の八詩仙を除いて最もよく知られたスールダースは、ナーバーダースが『バクト・マール』で称えたブラジ詩人スールダースであったという。だがこの紛らわしい状況は写本の書写者や校訂本の編者たちをも混乱させ、このもうひとりのスールダースの詩は八詩仙スールダースの詩集『スール・サーガル』に誤って紛れ込んでいるという。そこで本論では、聖者伝の記述をとおして、このふたりのスールダース像に迫る。なお、ムガル皇帝アクバル（在位：1556-1605年）は八詩仙スールダースともうひとりのスールダースの両者に関係する重要な人物であるため、それぞれの伝記の該当箇所を比較することで、ふたりの人物像の違いを明らかにしたい。

ナーバーダース著『バクト・マール』に描かれたスールダース
ナーバーダースは1600年ごろに⁴ブラジ・バーシャーで『バクト・マール（信徒列伝）』を著し、六行詩（chappaya）で偉人たちを称えている。次の六行詩はスールダースについてのものである。テキストは Śaraṇ 版を使用した。

gāna kāvya guna rāsi suhṛda saḥacari avatārī.
rādhākṛṣṇa upāsa rahasi suhka kau ādhikārī.
navarasa mukhya śṛṅgāra vividha bhāntina kari gāyo.
vadana ucārata vera sahasa pāṃyāni hvai dhāyo.
aṅgīkārakī avadhi yaha, jo ākhyā bhrātājamala.
śrīmadanamohana sūradāsakī, nāmaśṛṅkhalā jurī aṭala. 126

³ Mītal (1958: 5)によれば、ムガル皇帝アクバルの宮廷にはスールダースという名の歌手がいたという。『アーイーニ・アクバリー』（*Ā'in-i Akbarī*）にはラームダースの息子スールダースとして記されている。またムガル帝国の初期の歴史書 *Muntakhab al-Tawārīkh* (16-17c.)にはラクナウ在住のラームダースという名の歌手についての記述もある。

⁴ Hare (2011: 45)は、ナーバーダースの『バクト・マール』の創作年を1585年から1623年の間としている。

[彼は]詩作と朗誦の才に恵まれ、美しいところをもち、[ラーダー・クリシュナ神の]付き人の現身である。ラーダー・クリシュナ神を崇拜し、神秘の喜びに与った。九種の情趣のなかで特に恋の情趣でさまざま[詩を]詠いあげた。[その詩は]口から発せられると、千の脚が生えて走り出した（＝瞬く間に広まった）。これは神の承諾の極みであり、双子の兄弟の名譽である（＝信徒でありながら、神と双子の兄弟であるかのような名譽に与った）。聖なるマダンモーハンとスールダースの御名の鎖はゆるぎなく結びついている。

この短いスールダース礼賛には、彼が恋の情趣（シュリンガール・ラサ）の詩を得意とする詩人であり、当時すでに知名度があったこと、マダンモーハン神と固い絆で結ばれており、その付き人の化身と位置づけられ、神の双子の兄弟であると述べられている。マダンモーハンとはクリシュナ神の別名であり、スールダースがマダンモーハンの御名と強く結びついていることから、「スールダース・マダンモーハン」として校訂版の目次には記されている。

このようにラーダー・クリシュナ信仰のブラジ・バーシャーの詩人であれば、八詩仙のひとりである著名なスールダースとの違いは微妙である。以後スールダース・マダンモーハンとよぶことにするが、この詩人が八詩仙のスールダースではないと明らかになるのは、ナーバーダースの『バクト・マール』からおよそ 100 年後に大幅に逸話を増やして注釈を描いたプリヤーダース（Priyādās）版によるのである。

プリヤーダースの描いたスールダース

プリヤーダースは、1712 年に古ヒンディーの散文体でナーバーダースの『バクト・マール』の注釈『バクティ・ラサ・ボーディニー（信愛の甘露の菩提）』（*Bhaktirasabodhini*）を著した⁵。ナーバーダースの短い 6 行詩の内容を詳しく描く部分もあるが、この注

⁵ 『バクト・マール』の校訂本の多くには、ナーバーダースの 6 行詩につづいてプリヤーダースの注釈も掲載されている。本稿では Śaraṅ 版を使用し和訳した。

釈の特徴は新たな逸話を書き加えた点にある。プリアーダース自身の創作か、およそ 100 年のあいだに新たに流布した逸話を集めたものであるが、何もないところから創作された虚構とは考えにくい⁶ため、後者の可能性が高い⁶。

以下にプリアーダース版のスールダース・マダンモーハンの^{ワールダー}逸話を日本語訳して紹介する。なお、複数の逸話からなるため、原文にはないが、「徴税官スールダースと粗糖の逸話」と「信徒の靴を守る逸話」と「アクバルの財の使い込みの逸話」と「神の恩寵の逸話」という小見出しを便宜上付した。

徴税官スールダースと粗糖の逸話

[彼は]名はスールダースといい、咲いた蓮のような美しい目をしており、信愛に揺れ、信愛[の甘露]を飲み、正しく生き、ほかの者をも[正しく]生きさせた。サンディーラーの徴税官になった。[神への彼の]愛は斬新なものだった。粗糖を見ると、二十倍の金額を持ってきた⁷。彼は、マダンゴーパール神にプワー（甘い揚げ物）を召し上がっていただきたいと言った。[マダンゴーパールへの]愛に思いをはせ、荷車に[粗糖を]積んで送った。到着すると真夜中になっており、シュヤマ（クリシュナ神）は[夢枕で]行者に今食事を持ってきて供えるように命じた。それから[クリシュナ神は]起きて召し上がった。

この逸話において最初に注目されるのは、「蓮のように美しい目を

⁶ ナーバーダースのオリジナルテキストからプリアーダース版で逸話が増える現象に関して、トゥルシーダースについてはヴァースと呼ばれる語り部たちの伝承する逸話から採用された可能性を Lutgendorf (1991: 137-157) は指摘しており、そこから類推すると、スールダース・マダンモーハンの逸話についても何らかの伝承をもとにプリアーダースが記述したと考えられる。

⁷ 二十倍の金額が指す意味は2通り考えられる、つまり、サンディーラーからヴリンダーワンに運ぶために元の金額の二十倍かかる、または、市価の二十倍の高値で買い付けた、である。文脈からは判断できなかった。

している」とスールダース・マダンモーハンの目についての記述がある点である。つまり盲目の詩人ではないことが示唆されているのだ。男性詩人の容姿、それも目の美しさだけを強調していることから、同名の八詩仙との混乱を避けるために、プリヤーダースはあえてこの記述を冒頭に置いたのではなかろうか。

その後の描写は、彼がサンディーラー（現ウッタル・プラデーシュ州ハルドーイー県）の徴税官であり、マダンゴパールMadan Gopalの信者であったと続く。彼の送った供物に対してクリシュナ神が言葉を発するという神の具象化は、聖者伝文学の定番であり、信徒の信仰の篤さに神が応えたことを意味している。

信徒の足を守る逸話

「[マダンモーハンを]信徒の足を守る方と呼びましょう」という賛歌バドを創作し、親愛の形を遠くまで示した。ある行者がそれを知って、試したいと思った。やってきて寺の扉を開けて「[すぐに]戻る」と言って座り込んだ。[スールダースは行者の]靴を手に持ち、「昼も夜も歌いつづけたわたしの願いは今叶った」[と思った]。聖者ゴースーインが中から数回呼ぶと、「[行者が靴の]世話をするように託しました」と全てを語った。「わたしは人の足[の世話]に集中しているのです」

スールダース・マダンモーハンが詠った賛歌の内容の信憑性が試される逸話である。彼が創作したとされる賛歌は次のものである⁸。

あなたこそがわたしのすべてです。
多くの満足をいただきます。
[あなたの]蓮の御足、宝石の爪のために、
この世の喜びを捨てましょう。
家々を歩き回るのならば、ハリよ、
あなたを恥じらわせるでしょう⁹。

⁸ スールダース・マダンモーハン詩集に収められた第2番の賛歌。Mital (1958 :25-6) のテキストから和訳した。

⁹ 罪深い信者である自分があちこち歩き回れば、クリシュナ神に

わたしはあなたのものであると言うのに、
ほかの者のものであるとどうして言いましょうか。
主よ、あなた以外に、
哀れな者の居場所がどこにありますでしょうか。
あなたの前で首を垂れて、
どうしてほかの者に頭を下げましょうか。
胸の金の首飾りを捨てて、どうしてガラスで作りましょうか。
すべての輝きを傷つけて、
[どうして]世間を笑わせましょうか。
象から降りて、どうしてロバに乗りましょうか。
白檀のペーストをやめて、
[どうして]カージャルを顔に塗りましょうか。
如意牛を家から捨てて、
どうしてヤギの乳しぼりをしましょうか。
金の御殿を捨てて、どうして藁で小屋を葺きましょうか。
主よ、[わたしの]足を払いのけるなら、
ほかのどこにも行く場所はありません。
スールダース・マダンモーハン
何度生まれ変わっても詠いましょう。
[あなたを]信徒の足を守る方と呼びましょう。

この最終行で「あなたを信徒の足を守る方と呼びましょう」とクリシュナ神に呼びかけて詠っており、クリシュナに代わって詩人自ら信徒の足を守ったという逸話である。

アクバルの財の使い込みの逸話

[スールダースは]王の財を使って行者達に食事をさせ、何も迷わなかった。[マダンモーハンへの]信愛に没頭するように迷いはなかった。国庫を徴収するために[役人が]やってくると、こうなった。[金庫に]石を詰めて、彼は夜のうちに逃げた。手紙を書いて置いた一信徒たちがお金を使ってしまった

恥をかかせることになるので、自分をそばに置いてほしい、という嘆願ワイナヤの意味に解釈した。

ので、わたしは去ります。[夜のうちに]起きて行ってしまった。大帝のもとに[金庫が]到着し、箱を開けてみて紙に[書かれた]文書を読むと、[大帝は]彼の信愛に喜んだ。

[大帝はスールダースを]連れ戻すように言って使者を送った—「朕はとても喜んでいる。心にわだかまりはない」。[スールダースは]「わたしは森（ヴリンダーワン）に定住しました」と書いた¹⁰。[だが]宮廷のトーダルマル¹¹は言った—「財をなくしたのだ。捕まえてこい」。愚か者（トーダルマル）は[アクバルの心を]一変させた。彼が御前に連れてこられると大帝は言った—「朕から遠く離れたところにつかまえておけ」。残忍な男（後述の二行詩に言及されているダシャタムという名の男）に引き渡して拷問を加えさせた。[スールダースが]二行詩を書いて送ると、アクバル大帝はそれを見て喜んだ。「行け、かの地（ヴリンダーワン）へ。すべての財貨はお前に奉獻したものとする」

[スールダースがアクバル大帝に送った二行詩]

ひとつの闇で[この世は]暗黒になる。

[あなたは]そのうえ虚無をお与えになった。

太陽であるアクバル大帝よ、

[残忍な男]ダシャタム¹²から[わたしを]お救いください。

徴税官であったスールダース・マダンモーハンが集めた公金を信徒のために使いこんだ、つまり横領したという興味深い内容である。ムガル皇帝アクバルと廷人トーダルマルが登場していることから、彼の時代が判明する。ヒンドゥー教の聖者伝で寛容なムガ

¹⁰ テキストでは *banata na dāryo* であったが、意味が取れないため *vana tana dāryo* で *vana* (森) をヴリンダーワン、*tana* (身) とし、「この身を森に置いた>定住した」と解釈した。

¹¹ トーダルマル (Toḍarmal) はヒンドゥー教徒の家庭に生まれたが、アクバルの宮廷の九宝に数えられた財務大臣。優秀な軍人であったともいう。1589年にラーホールにて没する。

¹² スールダース・マダンモーハンを捕らえて拷問を加えた男の名。

ル皇帝として描かれるアクバルは、この逸話でも彼の横領を美德として受け取り、最後にはその罪を恩赦している。

神の恩寵の逸話

ヴリンダーワンに来て、心は甘美に浸った。[スールダースの]詠った賛歌^{パド}を聞くと、美のラサの山のようにであった。[賛歌が]描かれると、百ヨージャナ[の距離]まで届き、人々はその内奥を聞くと、この世でさらに欲した。

スール・ドゥヴィジャというバラモンは、自らの[神の]宮殿を歩き回り、その賑わいに浸り、心には[神の]双子としての輝きを持っていた。マダンモーハンを信奉し、^{マハー・フラブ}尊師を信奉する。どうして驚くべきことであろうか。[お二人が]情け深く見守ってくださったのだから、当然である。

スールダース・マダンモーハンの作品が広く知れ渡ったという記述は、ナーバーダースが6行詩に描いた「[その詩は]口から発せられると、千の脚が生えて走り出した(=瞬く間に広まった)」に基づくものと考えられる。

スール・ドゥヴィジャというバラモンとは、彼の本名を指すものであろう。そのスールに信徒名に使われるダース(神の僕^{しもべ})をつけて入信後の名はスールダースとなったと考えられる。ドゥヴィジャつまりバラモンは、彼のジャーティを示しており、ここから彼が高カースト出身であることが分かる。

さて、この逸話に登場する尊師とは誰なのだろうか？ナーバーダースはラーマーナンド派であったが、注釈者プリーヤダースはチャイタニヤ派であり、ここでの尊師はチャイタニヤ(Caitanya)を指すと考えられる¹³。クリシュナ信仰のチャイタニヤ派の奉じ

¹³ 開祖チャイタニヤ(1485-1533)は、クリシュナ神とその恋人ラーダーを歌や踊りで熱狂的に信仰するバクティ(信愛)運動を繰り広げたベンガルの宗教指導者。彼はヴリンダーワンを訪れ、神話上のどの場所でクリシュナ神の事跡があったかを発見したという。チャイタニヤ派(ガウリーヤ・サンプラダーイともいう)は、ベンガル、オリッサから北インドにまで影響を与え、教義は

る神はマダンモーハンであり、ヴリンダーワンでマダンモーハンを信奉し、その御名を頂くということは、スールダース・マダンモーハンがチャイタニヤ派の信徒であったということになる¹⁴。

『84人のヴァッラバ派信徒列伝』に描かれたスールダース

次にヴァッラバ派の八詩仙スールダースの人物像を聖者伝の描写から見てみよう。先述のスールダース・マダンモーハンの聖者伝とくらべると、ヴァッラバ派の聖者伝『84人のヴィシュヌ派信徒列伝』で八詩仙スールダースを描いた逸話はかなり長い。彼がサーラスヴァト・バラモンでデリーの近くのスィーンヒー村に暮らしていたことから始まり、会得した信仰の詳細な内容、ヴァッラバ師との出会い、クリシュナ神が彼を助ける奇跡等が描かれている。なお、彼の目が不自由であったことについても言及されている。

本論で注目するのは、八詩仙スールダースの聖者伝にも登場するムガル皇帝アクバルが、ふたりのスールダースに対してまったく異なる態度を示している点である。徴税官としてムガル皇帝アクバルに仕える身であったスールダース・マダンモーハンは公金を使い込んで捕まりアクバルと出会うことになるが、八詩仙のスールダースについてはアクバルの方から会いたいと探し求める。

『84人のヴィシュヌ派信徒列伝』の Parīkh 版に描かれたスールダースの 11 の逸話¹⁵のなかで、アクバルが登場するのは逸話番号の 3 と 4 のふたつである。これまで日本語訳がないため、以下に逸話の 3 と 4 を和訳して紹介する。なお、テキスト (Parīkh 版)

弟子たちによってヴェーダーンタ哲学による体系化がなされた。
¹⁴ チャイタニヤ派はスールダース・マダンモーハンを宗派の詩人と位置付けている。チャイタニヤの主要な弟子のひとりであったサナータン・ゴースワミー (Sanātan Gosvāmī, 1488–1558) がスールダース・マダンモーハンの師であったという (Mītal 1958: 6)。

¹⁵ Dvārakādās Parīkh, ed., *Caurāsī vaiṣṇavan kī vārtā*, Indor: Vaiṣṇav mitr maṇḍal sārvaṇanik nyās, 1948, 428-473. 本文中の和訳にはこのテキストを使用した。

の途中には注釈（Bhāvaprakāśa）も含まれており、その部分は[注釈]と小見出しを付けて区別して示した。なお、アクバルの求めに応じてスールダースが最初に詠った賛歌は極めて長いため、冒頭のみを訳した。

逸話 3

そして尊師（ヴァッラバ）はスールダースに会った時におっしゃった—「来なさい、スールの海よ」。その（スールの海と呼びかけた）意味はこうだ。海にはすべてのものがある。同様にスールダースは千の時の賛歌を創作した。そのなかで遁世の知、さまざまな種類の信愛、いくつもの神の権化、それらすべての遊戯を描いた。その後、彼の賛歌をあちこちの人々が習って詠いはじめた。そしてある時ターンセーン¹⁶がスールダースのひとつの賛歌を習ってアクバル帝の御前で詠った。

これらはみな信徒の特徴と知れ。

咎める者もいれば、称える者もいる。

叩いて富を奪う者もいる。

やって来て白檀をつける者もいれば、

埃を投げる者もいれば、食事を与える者もいる。

ある者は大馬鹿者、外道と言う。

ある者は非常に異なる者と言う。

心に良いも悪いも何もない。クリシュナの御足に没頭し

一瞬たりとも離れることはない。

スール[ダース]は語る、

幸にも不幸にもとられない者は、山を持ち上げる方（クリシュナ）にすぐさま会うことができる。¹⁷

¹⁶ ターンセーン（Tānsen, 1500 – 1586）。ムガル帝国の楽士で北インドの古典音楽の成立に寄与した。

¹⁷ この賛歌を含めて、逸話に描かれた賛歌の冒頭には詠う音階を定めたラーガ名が記されているが、校訂本によってラーガ名が異なり、編者が加えたものと考えられる。翻訳では省略した。

これを聞いて、大帝アクバルは言った「こんな才能のある信徒に会うことができれば、言葉にできない[ほど嬉しい]」。そこでターンセーンは言った「この賛歌を作った者はブラジに住んでおり、彼の名はスールダースです」。これを聞いて大帝は、何とかしてスールダースに会えないものかと思った。その後、大帝はデリーからアーグラに来た時、自分の雑役係に言った「ブラジでスールダースがシュリーナート神の賛歌を詠っている。彼についてきちんと調べて聖都マトゥラーで朕に知らせてくれ。そしてこのことはスールダースには知られないように」。

かの雑役係がシュリーナート神の[寺の]戸口にやって来て問い合わせた。そこでスールダースがマトゥラーに行ったということを知った。そしてかの雑役係はマトゥラーにやって来て、その時そこに座っていたスールダースを発見した。そしてかの雑役係は報告した「ああ大王よ、スールダースはマトゥラーにおります」。するとスールダースを呼ぶために、アクバル大帝は十人余りを派遣した。そしてスールダースは大王のもとにやって来た。その時大帝は彼をとてども丁重に扱った。その後大帝は言った「スールダースよ、お前が著した数多くのヴィシュヌの賛歌のいくつかを朕に聞かせてくれ」。その時スールダースはアクバル大帝の前で次の賛歌を詠った。それはこのようなものだった—

ああ、心よ。マーダオ（クリシュナ神）を愛せ。

愛欲、怒り、奢り、貪欲を捨てよ。すべては[信愛とは]真逆のものである…。

[注釈]この賛歌はどのようなものであるのか。この賛歌を思い続けると、神の加護を得られ、心が覚醒する。現世から心が離れ、神の蓮の御足に向く。悪い交流に恐れる時に、良い交誼に心が向く。身体などへの愛情は減り、現世の執着は消える。神への愛がある者は超俗的である。これによって、親愛は増す。

これを聞いて、大帝は大変満足した。その後大帝はスールダース

を試してみようと思った。神の庇護を受けているのなら、朕の栄光を詠うはずがない。こう考えて大帝はスールダースに言った—「神聖なる神は朕に帝国を与えた。あらゆる有徳者は我が栄光を詠う。朕は彼らに金銭等を与える。彼らのようにお前も有徳者である。朕の栄光を少し詠ってみせよ。そなたの心にある願いを望むがよい」。こう大帝は言った。その時スールダースは次の賛歌を詠った。

心に場所はない。

ナンダの息子がいる。

他のものが心にどうして入り込めようか。

歩き、見て、日がのぼり目覚め、夜に眠って夢を見ても、

心からその甘美な姿は一瞬たりとも離れることはない。

ああウードー¹⁸よ、さまざまな話をしても、

この世の欲を見せても、どうすればよいのか、心は愛に溢れている。この身という器に海は入らない。

黒い身体に蓮のご尊顔。愛らしく甘いお顔に微笑みをたたえ。

スール[ダース]は語る、それを拝見したいと、眼は渴望する。

この賛歌を聞いて、大帝は思った。この者がどうして朕の栄光を称えようか。何か欲しいと思う者は朕を称えるだろう。この者は神の御子であるから、神の栄光を称えるだろう。

スールダースはこの賛歌の最後にこう語っている、「それを拝見したいと眼は渴望する」と。大帝はスールダースに言った—「スールダースよ、お前にはない眼がどうして激しく渴望するのか。お前はどのようなつもりでこれを語るのか」。その時スールダースは言った—「あなたにこのことがどうして分かるものでしょうか。誰もが眼を持っていますが、神を見たいと焦がれる眼を誰が持っているのでしょうか。神を拝見したいと願う眼を持つ者は、常に神のもとに暮らします。神の現身を見るという喜びの甘露をいつも飲みながら、[それでもさらに欲しいと]常に渴望するのです」。

¹⁸ ウードーは、クリシュナが直接出向くことができない時に、その伝言を届け人々を慰めるメッセンジャー。

これを聞いて大帝は言った―「この者の眼は神のもとにある。神を見ており、ほかの何も見ていない」。その時大帝はスールダースと和解したいと思った。二三の村と多くの金銭を与えようとしたが、スールダースは何も受け取らなかった。その時アクバル大帝はスールダースに言った―「修行者よ、少しは朕に命じてください」。するとスールダースは言った―「今後わたしを二度と呼ばないでください。わたしに二度と会わないでください」¹⁹。

[注釈]アクバルは分別のある人だった。それはなぜか。この者は、宗教行為を怠ったために、異教徒になったのだ。前世ではバーラムクンドという名の学習期の者だったが、ある日瀧さずに牛乳を飲んだために、牝牛の体毛が腹に入った。その罪で、この者は異教徒（ムスリム）になったのだった。

彼（アクバル）はスールダースに五体投地をして、別れた。

逸話4

その後スールダースは聖なるナートドゥワーラー²⁰に帰ってきた。その後大帝はアグラーにきてスールダースの賛歌を探させた。スールダースの賛歌を持ってきた者に金銭と金貨を与えた。それらの賛歌をペルシア語で書かせて読んだ。金貨の欲に目がくらんで、学者と詩人²¹がスールダースの賛歌を[自身で]創作して持っ

¹⁹ スールダースがアクバルに対して、二度と呼ばないことと会わないことを望むという逸話は、アレクサンドロス大王に向けた哲学者ディオゲネスが語った言葉「そこをどいていただくのが望みです。日光が遮られますので」を彷彿とさせる。

²⁰ ヴァッラバ派の御神体はイスラム教徒から守るためにラージャスターンのナートドゥワーラーに避難させられ今日に至る。この聖者伝はそれ以前の出来事であるため、ここでのナートドゥワーラーはゴーワルダン山の元の寺院を指すものと考えられる。

²¹ paṇḍita kavīśvara. Bartz の英訳ではパンディット・カヴィーシュワルという人物になっているが、個人名とは考えにくい。原文では複数形で扱われているため、paṇḍita（学者）と kavīśvara（詩人）と解釈した。

てきた。その時アクバル大帝は彼らに言った―「この賛歌はスールダースのものではない。これらの者は金のために賛歌を盗作したのだ」。すると学者と詩人は言った―「それがスールダースのものでないとどうしてお分かりになるのですか。これはスールダース自身の賛歌です」。その時大帝は持っていたスールダースの賛歌を自分の紙に書かせた。そして学者と詩人がスールダースの名を読み込んで作って持ってきたものと両方の紙を水にひたして言った―「正しいならば神がこれを裁いてくださる」。こう言って水につけると、その占星術師が作った紙は水に濡れたが、スールダースの賛歌の書かれた紙は水に濡れなかった²²。

[注釈]これと同様に、神に出会った神の御子が創作した賛歌を詠う者は、輪廻の海を渡りきる。世俗の者が策を講じて作った賛歌を詠う者は、このように輪廻の海に沈む。

その時すべての学者と詩人は恥じ入り、うな垂れて家に帰った。かのスールダースはこのように尊師のお気に入りへの神に仕える人であった。

『スール・サーガル』に混入したスールダース・マダンモーハンの詩

ブラジ・バーシャーによるバクティ文学を含む古ヒンディー文学は、口承文芸が中心である。作者が書き留めた作品で今日まで現存するものは少なく、詩の場合は、詩人が聞かせたものを作者以外の者が書き留め、その写本が流布することもある。いずれにしてもさまざまな系統の写本を今日のヒンディー文学研究者が校訂し編集している。盲目の詩人でヴァッラバ派の八詩仙スールダースは最も研究が行われてきた古ヒンディー詩人のひとりで、彼の

²² 能の演目『草紙洗小町』は、小野小町の歌を盗作であると主張した大伴黒主に対して、草紙を水につけて真偽を判断する。アクバルとスールダースの逸話は、『草紙洗小町』に類似する説話といえる。

作品『スール・サーガル』には複数の校訂本がある²³。作品によっては写本による差異の少ないものがある一方で、写本ごとに含まれる詩の数や内容などに大きな違いのあるものもある。後者の代表格が『スール・サーガル』で、それぞれの詩についてスールダースの真作と証明することは難しい。なお、どの詩人の作品であるかを示す根拠となるのは、主題や言語や用いられている韻律などの作風にくわえて、詩の中に詩人が自身の名を読み込むチャープ（chāp）とよばれる銘である。絵画に刻まれるサインのようなものだが、第三者が銘を入れて贋作を作るとは詩であっても可能である。アクバルの求めたスールダースの詩をまねて多くの者たちが褒美欲しさに彼の名で詩をねつ造したという先の逸話は、まさにこのことである。銘はスールダースであっても、真作かどうかの鑑定を水につけて行うという奇跡譚は、聖者伝文学に特有の脚色といえよう。

だが実際には、贋作かどうかの判別が困難な場合は多い。スールダースという同名で、同じ地域で同じくクリシュナ神に帰依し、使用言語も韻律も同じで、同時代の人物であったのだから、両者の作品を見分けるのは特に難しい。なお、スールダース・マダンモーハンが八詩仙スールダースの作品と偽って創作したわけではなくれば贋作にはあたらず、彼の場合は流布するうちに間違えられたり、編者によって誤って校訂されたりしたのだろう。

なお、八詩仙スールダースの作品として『スール・サーガル』に混入しているといわれるスールダース・マダンモーハンの詩には、彼の聖者伝の逸話にも触れられている「信徒の足を守る」詩がある。スールダース・マダンモーハンの「信徒の足を守る」詩は先に挙げたが、それに近似した以下の詩は八詩仙スールダース作として一般に流布しているものである。『スール・サーガル』の Nāgarīpracāriṇī Sabhā 版 166 番の賛歌から訳出し紹介する。なお、「信徒の足を守る」詩と同じフレーズは下線で示す。

あなたはわたしの命の主です。ほかでは、悲しみを得るだけ

²³ 近年では Bryant と Hawley がファテーブル写本をもとに校訂し、英訳を付して『スールサーガル』(Sur's Ocean) を出版している。

です。

わたしはあなたのものであると言っているのに、ほかの者の
ものであるとどうして言えましょうか。

如意牛を捨てて、どうしてヤギの乳をしぼりをしましょうか。

馬と象から降りて、どうしてロバに乗って走らせましょうか。

金や宝石の首飾りを捨てて、どうして胸にガラス[の首飾り]
をかけましょうか。

白檀のペーストをやめて、[どうして]カージャルを顔に塗り
ましょうか。

絹の衣を捨てて、[どうして]ぼろを纏いましょうか。

マンゴーのすばらしい実を捨てて、どうしてセーマル（イン
ドワタノキ）の[実に]走りましょうか？

海の波を捨てて、池でどうして泳ぎましょうか。

スールダースは語る、卑しく盲目であるわたしは[あなたの]
戸口にとどまり詠いましょう。

前半部がほぼ共通しており、後半では異なるフレーズが用いられている。しかし比喻表現は異なるが、後半部も「より良いものを捨てて悪いものを選ぶ者がいるだろうか」と問う類似した内容である。では、「足を守る」という最後の行が「盲目のスールダース」になっていることを理由に、この詩を異なる詩人による別の作品であるということではあるだろうか？古ヒンディー詩では詩人たちが同じフレーズを用いることはよくある。だが、ヒンディー語圏で一般に用いられている比喻表現が偶然にも重なったというには、下線部で示した箇所では、用いられている単語や動詞、語末の脚韻までもが同じであり、この詩に関しては同一の詩の変種と考えるのが妥当であろう。

では、この詩はどちらの詩人の作品なのだろうか？ちなみにスールダース・マダンモーハンの作品集を出版したミータルによれば、彼の 158 作品のなかで 22 作品について、『スール・サーガル』にも似た詩があるという²⁴。それらの検証にはさらなる研究が必

²⁴ 22 作品には、類似のフレーズがあるのみで全体としては同一の詩とは考えにくい作品も含まれている。ミータルは類似の 22 作

要であるが、少なくとも「足を守る」詩はスールダース・マダンモーハンの作品である可能性が高いと考えられる。その理由は、プリアーダースが聖者伝中のスールダース・マダンモーハンの逸話で紹介した賛歌であることから、プリアーダースの時代には彼の作品としてすでに知られていたことが分かるからである。著名な八詩仙スールダースの詩を改変したものであれば、クリシュナ信者たちのあいだですぐに盗作と噂になるはずである。プリアーダースがそのような曰くつきの作品の逸話を紹介するとは考えにくい。おそらく、スールダース・マダンモーハンの「足を守る」詩が『スール・サーガル』に誤って混入したのだろう。

さらにいえば、恋の情趣の優秀な詩人であるスールダース・マダンモーハンの作品を、八詩仙スールダースが盗作した可能性も排除できない。たとえ『84人のヴィシュヌ派信徒列伝』のなかでムガル皇帝アクバルが八詩仙であるスールダースの才能を別格として扱おうとも、この聖者伝がヴァッラバ派というひとつの宗派の作品であり、しかもスールダースはその宗派の八詩仙であったのだから、高く持ち上げられるのは当然なのである。穿った見方をすれば、ムガル皇帝アクバルは、ヴァッラバ派にとって彼らの信徒を権威付けてくれる、都合の良い登場人物であったともいえる。

品のうち2作品は八詩仙スールダースの作品で、20作品はスールダース・マダンモーハンの作品の可能性を示唆している。詳しくは (Mital 1958) 編集の詩の注を参照。

参考文献

- Barz, Richard. 1976, *The Bhakti Sect of Vallabhācārya*, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
- Bryant, Kenneth E. ed., John Stratton Hawley, tr., 2015, *Sur's Ocean: Poems from the Early Tradition*, Cambridge: Murty Classical Library of India/Harvard University Press.
- Entwistle, A. W., 1987, *Braj: Center of Krishna Pilgrimage*, Groningen: Ebert Forsten.
- Hare, James P. 2011, *Garland of Devotees: Nābhādās' Bhaktamāl and Modern Hinduism*, Ph.D. Dissertation, Columbia University.
- Lutgendorf, Philip. 1991. *The life of a Text: Performing the Rāmcaritmānas of Tulsidas*, Berkeley: University of California Press.
- Parīkh, Dvārkaḍās. & Brajbhūṣaṅlāl Maharāj, eds. n.d., *Caurāsī vaiṣṇavan kī vārtā*, reprint, Indore: Vaiṣṇav Mitr Maṇḍal Sārvajanik Nyās.
- Mītal, Prabhudayāl. 1958, *Sūrdās Madanmohan: jīvanī aur padāvalī*, Mathura: Agravāl Press.
- Śaraṇ, Sītārām. & Bhagvānprasād Rūpkalā, eds., 1914 [1910], *Gosvāmi śrīnābhājī kṛt Śrībhktamāla*, Lucknow: Tejkumār Book Depot.
- Śrībrajvallabhaśaraṇ., ed., 1960, *Nābhā jī kṛt Śrī bhakta māla*, Vr̄ndavan: Śrīvīyogī Viśveśvar.
- Ratnākar, et. al. ed., 1972, *Sūrasāgar*, vol. 1, Kāśī: Nāgarīpracārīṇī Sabhā.

*本研究は JSPS 科研費 15K02455 の助成を受けたものである。